新型コロナワクチン薬害と神の愛を皆様に知ってほしい

私は新型コロナワクチン薬害被害の当事者として、多くの人にワクチンの危険性を伝えなければならないと思っています。ワクチンで亡くなられたご遺族の方や、今もなおワクチン後遺症で苦しんでいる方々がいることが報道されないのです。ワクチン健康被害救済制度はほとんどの方に行き届いておらず、仕事や家、家族までも失い、適切な治療も受けられない方々が大勢いらっしゃいます。

全国各地で、多くのクリスチャンが立ち上がり声を上げているのをご存知でしょうか。「全国有志クリスチャンの会～地の塩ネットワーク～」がその一つです。現在、会員の牧師や信徒の皆さんが訪問してくださり、目の見えない私のために我が家に集い、家庭礼拝、賛美の時間を持つことができています。一年前には考えられないことでした。驚くばかりの恵みとはこのことでしょうか。

これからも私の経験したこの神様の愛を、一人でも多くの方々に知っていただきたいと願い祈っていきます。

【イエスは彼女に言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。苦しむことなく、健やかでいなさい。」
新約聖書マルコの福音書五章三十四節】

ワクチン後遺症で全盲状態になった私が、なぜクリスチャンになったかお話します。

よっぴークリスチャンネル

5/19 QRコード

発行：全国有志クリスチャンの会～地の塩ネットワーク～
トラクト委員会

https://zenkuri-jp.net/

QRコード

神の愛にふれて ― 陽子

ある日突然全盲状態に・・・！

私は関西在住三十代の女性、夫と小学生の息子の三人で暮らしています。 私たち家族は アウトドアが大好きで、いつも日本各地、いろいろなところへ出かけていました。そんな幸せな日々が、ある日を境に一変しました。 それはたった一度の新型コロナワクチンの接種により、私は全盲状態になってしまったのです。

疾病名は眼球使用困難症と言い、視力や視野には問題ないが、脳神経の過剰な炎症による重度光過敏を発症。 部屋は真っ暗にして外の光を遮断し、アイマスクをした状態で発症以来二年半以上、家の外へ一歩も出ることができなくなってしまったのです。空を見上げる事はおろか、家族の顔すら見られない状態となってしまったのです。私たち家族は突然、絶望と悲しみのどん底に投げ落とされました。

神は、私の帰りをずっと待っていた

遡ること2020年にコロナパンデミックが始まりました。テレビでは毎日のように、感染者数や重傷者、死者数などが報道されていて、私は恐怖を感じていました。 その時に小学校に上がったばかりの息子が、「なぜ世界中でこのような人を殺すウイルスが出回っているの？」「僕はウイルスにかかって死んでしまったらどうなるの？」と問いかけられましたが、私は何も答えることができませんでした。

そんな中世界の救世主となるワクチンがものすごいスピードで開発され、多くの人類を救うと 大々的にニュースで報道されるようになりました。 私は「やったぞ、これで周りの人に迷惑をかけなくてすむし、会いたい人にも会うことができる」と、喜び勇んでワクチンを接種しました。 ところが、その後どんどん体調が悪くなっていき、激しいめまいや頭痛が起き、とうとう二週間後には光過敏を発症したのです。その後、病院を何軒も回り治療法を探したのですが、何一つ分からず絶望しました。

実は、これらの症状が起きる直前に、イエス・キリストの公生涯の映画を観る機会がありました。その映画を観ながら、私は幼い頃に教会へ行っていたことを思い出しました。そんな中で、まだギリギリ目が見えていた時に、父が置いていった教会の古いパンフレットが目に入ってきました。 【……『お前の弟は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのは当然ではないか』新約聖書ルカの福音書十五章 十一節～三十二節】 私はこの聖句を読んだ後、薄暗い部屋の中で必 死にイエスの十字架を想い、私を救ってくださるのはこの方しかいない、今まで長い間神様に背を向けてきたことを悔い「ごめんなさい、ごめんなさい」と神様に涙を流しながら必死に祈っていました。

すると不思議なことが起こりました。 突然、自分の心臓のあたりがブルブルと震え出しました。その震えは自分の意思とは違い、喜びに満ちた感激の震えでした。そしてその瞬間、柔らかな暖かい光が薄暗い部屋の中を照らしました。 そして神様は私を御腕の中に抱きしめてくださり、神様の元へと帰ってくることができたのです。

息子を通して神は決して私を見捨てないことを知った

しかし、その喜びの一方で体調はますます悪くなり、聖書も読めなくなっていきました。 そしてついに、真っ暗な部屋で、常時アイマスクをしなければならない生活になってしまいました。 体中全身に炎症が回り、目がえぐり出されるような痛さと、立ち上がって歩けないほどの倦怠感、重度の感覚過敏で、のた打ち回る日々でした。

訪問診療を利用していましたが、診療の先生は私がワクチンでこのような病気になったとは信じてくれず、「痛み止めの薬を飲んでいるのだから、光を見ることができないのはあなたの甘えだ。」とまで言われました。 他の訪問診療を探しても、私の異常な状態を見て、診療を断られるケースもありました。 私が痛い、苦しい、死んだほうがマシだと毎日うめいている姿を見て、次第に家族もどんどん疲れ果て、私を支える気力すら奪われていきました。

暗闇の中での孤独と絶望感で、生きることの希望を完全に失い、 神様に祈りました。「神様、私は罪人です。しかし、あなたの元へ帰ってきました。けれど、どうしてこれほどまでに私に試練をお与えになるのでしょうか。私には、この試練を乗り越えることができません。どうか死ぬことをお許しください。」 そして、聖書を抱えて電気の延長コードで首を吊って死のうとしました。

その時、リビングにいた息子が私の部屋へやってきました。「ママ」と呼ばれましたが私は黙っていました。すると息子は真っ暗な部屋の中を伝い歩き、私を探し出しました。 そして息子の手が私の背中に触れたときに、息子は私の背中をぎゅっと抱きしめて「ママ、お願いだから死なないで！」と言いました。 私は号泣して息子を抱きしめました。息子と神様に何度も「ごめんね」と謝りました。 神様は私を死なせなかった。私に何か目的があるのだと感じました。そして、もう死なないと決めました。

後に、息子にどうしてあの時私が死のうとしたことがわかったのかと聞くと、息子はリビングで遊んでいた時に、急に神様から「ママを助けなさい」と言われたから助けに行った、と言いました。ママの病気が治って欲しいから神様を信じたと言ってくれました。 なんと幸いなことでしょうか。 神様はこのような私をも見捨てず、愛してくださったのです。